

ナゴヤ子ども応援会議

日時：令和2年1月8日（水）

11時00分～12時12分

場所：名古屋市役所本庁舎 第一会議室

（事務局）

ただいまより、ナゴヤ子ども応援会議を開催します。

会議に先立ちまして、事務局からご報告をさせていただきたいと思っております。本日の会議の出席者の紹介につきましては、お手元の名簿と配席図をもって代えさせていただきます。なお、鎌田委員におかれましては所用により欠席でございますのでよろしくお願いいたします。また、本日の会議におきましては、会議要綱第5条に基づく関係者として、廣澤副市長にご同席をお願いしております。

それでは、開会にあたりまして、河村たかし名古屋市長よりご挨拶をお願いいたします。

（河村たかし名古屋市長）

はい、それでは、ご苦労さんでございます。おはようございます。ありがとうございます。

まあ、これ、市長が開催をお願いしてやるという会議で、法律で決まっているものでありますが、とにかく私も71歳になりまして、しょっちゅう言っている事ではありますが、やっぱり子どもさんをみんなで応援してやろうという、お孫さんの人生を。こうしろ、ああしろ、ではなくて。ようやくだいたいこれに、70年間かかった。

ちょっとわかりにくいですわ。なんでか言うと、やっぱり儒教に洗脳されているからです。これ、朱子学ですね。暮れにちょうど井沢元彦さんの、私は弟子を自認しておりますけど。彼の本を2冊ほど読みまして、そうだなこれほど。何回も言っておりますけども、教師が周りにおるけど、（自分の受け持った児童生徒のことを）教え子、教え子というでしょ。なんで子どもになったんだと。本当の生みの親は知っているけど、（教師が）親になるなら（そのために）親の必要な何かがあるんじゃないかと。それはなんでそうかと、いろいろとつらつら考えてみると、井沢元彦氏の本で言っておりますけど、やっぱり儒教、なかんずく朱子学というもの。尾張藩は特にそうですけども、徳川義直がものすごく熱心であったそうですけども、儒教・朱子学の最高道徳は、「親に孝なれ」、親孝行。これが最高道徳。とにかく政治が間違っておっても親に従えと言っているくらいですから。「教え子」というのはどういうことかということ、先生が「俺は親なんだ」と、したがって包括的に従え、という意味なんです。

皆さん自覚しているかどうかかわからないですけど、どうもそうですよ、やっぱり。今、一番熱心にキャリア教育について、文科省に、いろいろ言っていたら資料送りますとあって、これの予算の（編成をしている）ところですけど、一番最後に、公立学校の教育活動として配置し、次のような取り組みを行う。サポートスタッフ（非常勤）

と。わざと非常勤と限定して、この配置に要する費用の3分の1以内を補助するということなんです。だから、学校内のいろんなものについては、これは教師が包括的にやるんですよ、やっぱり。儒教なんですよ。

だから、2か月前になるかな、ロサンゼルススのベニス・スクール高校を視察してきた。で、ベニス・スクールで使っている資料を日本語に訳したものを配布しましたけど、いわゆる、ロサンゼルススのキャリア教育です。スクールカウンセラーも中身が全然違うようにですね、アメリカと日本では、キャリア教育も全然違うもので。教育委員会を所管する廣澤副市長が来ておりますし、とにかく難しいことを考えずに、ロサンゼルスはロサンゼルスで、ベニス・スクールでいいですよ。カリキュラムを作らないかん。国より先に行くのだから、国のやつをどんだけ読んどっていいかんですよ。

具体的に言うと、15項目ですね、例えば公務員とか、農業とか、それから、医療サービス。15の産業分野のパスウェイに係るカリフォルニア州教育局の指針ということで、農業、芸術、建築、ビジネス、金融、教育、エネルギー、ずっとありますけど、公共サービスもあります。そういう産業分野を、またさらに5つ平均ぐらいのパスウェイに分けて。

どうなってるの、どのぐらいのコマやっておるの、と聞いたら、4つのコマに1つくらいありますと。ということは、まあわかりやすく言うと、推測も入れてですけど、数学の授業のようにあるんですよ、要は、英語の授業のように、これが。で、誰がやっておるのと言ったら、確か4人か5人だと言いましたけどね。そんな少なくてできるのかと。複数やっておられるということになる。これは、途中で変えることもできると聞きました、子どもさんが選択を。

ということで、もっと驚いたのは、数学とか、英語とかありますけど、そういう授業はこっちに合わせてやっていますということです。例えば数学一つとって見た場合にですね、この中に出てくる、情報通信技術の仕事につく場合と、サービス業・接客業につく場合と、全然違うではないかと。例えば商業簿記が数学に入るのかどっちなのかは知らんけど、商業簿記をやっていくパターンと情報通信技術でノーベル賞とろうかという人達と、全く違うわけですよ、こちらに合わせるという。なるほどと。

高校生でしたけど、楽しそうですわね、とにかくみんな。自分のやりたいことをやるとるわけですよ。教室も別にある。保健科学か何かの教室にいきまして、人体の解剖模型みたいなものもある。えらいことですね。高地に上がってきて酸素がないところへ行くとどうなるんだ、と言えば、河村さんもいっぺん入ってみやーと生徒と一緒に入ってやるんです。

まあ、わざわざこういうことを、非常勤という。文科省も、気はあるんですわ。今はおらんけど、前教育長の杉崎氏は、4・5年前か前の教育長だから、杉崎氏の証人付きですから聞いてもらえばいいけど、この時の文科省の幹部のところに行って、まあとにかく私も総理を狙う男でやっと思ったもんで、それなりに教育も勉強しようとしたと。

こんな単純なこと、それは常勤スクールカウンセラーのこと。これはキャリアの前の段階のもの。私自身、(常勤スクールカウンセラーが)必要だなんてことは、考えてみればどえらい単純なことである。例えば膵臓がんであったら、ドクターは膵臓がん

のドクターが必要であって、ほかの医者じゃ無理だ、これは。どうしてこんな単純なことが、国会でも質問はないし、マスコミでも誰も言えせんし、名古屋市でも教員1万人おるけど、誰からも提案をもらったことない。どうなっておるんだと言ったら、彼は、教師でない人が校長になるんでしょと言う。その何が悪いのというと、それがいかんのですわという。学校は教師支配で、教師でないとだめだという。この壁が破れないぞと言う。ということがありまして、文科省がやりかけた「チーム学校」と考え方はだいたい同じですわ。

だけど、なかなか進んどらんわね、ほんとに。名古屋だけだっというもんね、常勤スクールカウンセラーは。

今の僕の問題意識は、常勤スクールカウンセラーの次に来たのが、今の「画一斉教育からの脱却」という問題で、オランダ・ドイツでイエナ(プラン)、アメリカでPBLとか、そういうやつに想いが来ている。

今は、キャリアという名前が、どうしても、いわゆる「就労支援」になってしまう。子どもさんのやりたいことを小学校くらいから、「あんたのやりたいことは何だ？」という。この間、孫に聞いたったら「ユーチューバーになりたい」と言った。難しいぞと言っておいた、まあそれでもいいんだけど。そういうのをできれば自分の力で発見して、そのためには、どういうスキルが必要で、自分で、自分を中心にしてトレーニングしてみんなで応援するという。これをやると、皆さんご承知のように、「一人の子も死なせないナゴヤ」、という高いハードルを設定して努力していますが、ならないでしょう、残念ながら。いろんな悩みをおっかさんと子どもと相談するのは、やっぱり常勤スクールカウンセラーが必要だと思いますよ。その先に、「あんた、こういう道があるよ、人生の中で」と。やっぱり、人生に絶望しないようにするのが究極的に。これはどえらい重要ではないか、ということが、今の私の71年間生きてきた中で思っておるところですわ、これ。

なんでこうじゃないかという、また儒教になるんだけど、やっぱり儒教はね、僕もそうでしたけれど、親の仕事を継ぐんですよ。親に包括的に従わなければならない。職業選択の自由というのは、儒教・朱子学の世界にはないと思う。蛙の子は蛙、ということ。私はずっとそれでやりかけて、途中で挫折したほうですけども。

だけど、そうなっておるもんで、子どもさんたちに、やっぱり神様がおって、あとはずべからくみんなお生まれなんだと、それぞれにおいていろんな職業選択する場においても。井沢さんの本を読んでいると、チャンスは自由だけでも、結果の平等まで要求するという、普遍的な強い概念があるようですね。まあ、その子なりに生きていく道がある。今日の朝刊で神奈川県例の不幸な事件が出てますけど、生きていても仕方がない、というとんでもない議論があるけれども、そうではない。それは発見してあげないといけない、社会の中で。ということを経験に結び付けてやってあげないといけない。大チャレンジをしようではないかと。

今の状況だと、ハローワークにそう言っておいた。なるほどね、と。キャリアコンサルタント、厚労省の資格で4万5,000人くらいいる。ただし、それは企業内で就職をどうするかとか、大学出てどうやって就職するかとかで、小学生にそんなことをやったことはないですよ。喜んだんですよ、厚労省の担当者。そんなことできたら

素晴らしいですね。それで、文科省が担当しているんで文科省の担当部局に言うと、文科省もびっくりしていましたがね。だけどこれは非常勤、とわざわざ限定ですからね。

アメリカでも非常勤はいる、ロザンゼルスでも非常勤はいるが、今の状況だと、そこへどうやってこれをやっていくか。タブレットを全生徒に導入しろと言っているんだから、そうなると、普通だったら、教員の中から、一万人もおるんだから、ふつふつと、えらいことになったぞこれほど、生徒にばかにされるのではないか、これではと。もっと活用の方法、特に不自由な人たちにとってはものすごくいいと言われていきますね、タブレットは。ふつふつと、教員の中でプロジェクトチームくらいできて、どうやって対応していこうかと。河村さんは、文科省が言っているチーム学校というものをさらに進めようとしている、いよいよ職業までやろうとしている。となったら、みんなでもう対応しようかというものが出てこないといけないでしょ、学校の中で。今のところ、何の返事もない。ノーコメント アンド ノーアンサー。これではあかん。あかんと思いますね。

引っ張ってくれる人がいないと、こうなったら。なので、教育委員の皆様と、私も71歳で、いつまでも生きていないと思うが、一つ是非、そういう気持ちになって、来年度予算に向けて具体的にやっていかないといけない。

皆さん、私はこういう関係では1円も削るつもりはない。つもりはない、ではなく削りません。財政危機は嘘ですから。誰も信じてくれないから、仕方ないからツイッターにいられている。

リチャード・クーさんの「追われる国の経済学」。真ん中は難しい内容なので途中で分からなくなりますが、初めと終わりで、要するに、金を借りない状況の経済学というのはないんだと。MMP（現代貨幣理論）とは違いますよ、基本が違う。あれはいい分析ですね、本当に。

経済学というのは、今まで勉強してきたのは、必ず企業というのは利潤の最大化を求めると。だけど、第一次世界大戦のあとのショック、ものすごい需要が収縮しますから。それから最近で言うと1990年ごろからのバブル崩壊とリーマンショックと、ものすごく縮まった場合、企業というのは、儲けるよりも無借金、金を返すようになってしまうと。それが1社である場合はいいけど、みんなでやる場合、大不景気になる。そうなったときに、金が収縮してただでさえ大変なのに、財政がさらに緊縮しようとするわけです。そうするとさらに地獄へ落ちます。それで第二次大戦を起こしたというように書いてありまして。

何が重要かという、名古屋でやられておる常勤のスクールカウンセラーのようなものですね。財政法4条で、そういうことは起債でできないような風に見える規定になっておりますけども、そんなもん条例にすればいいんですよ、自分のところで。そういうことがやってはいけないのなら、大問題にしてやればいいですよ。まったく遠慮しなくていいですから、だいたい起債で2,000億、現金で200億、これは使わなければいけない、名古屋は。

使わないとどういうことかという、財政が非常に悪くなるんです。産業の力を落とすから。人間の力を落とすということ、教育的に言うなら。そういうことにな

りますので、本当に。

遠慮せずに、ということで、この前教育長と話をしておいたら、1人1台のタブレットも、教員が大変だって言っておったけれど、何を言っておるか、ありがたいことだろう、こんなチャンスをもたらすと。みんなで勉強のチーム作って、中日文化センターに行けばいい。生徒に教えてもらった方が早い。

例えばタブレットで言うと、そういうこともできるし。形式的にとどまっていたはいけませんよ。名古屋がこうやってやれるのも、トヨタががんばってきて、トヨタばかりじゃないですけど、プリウスだとか先端を走ってきたわけですよ。そういったチャレンジの気持ちでやらないと、あかんですよ、産業界に申し訳ないですよ。これだけ金儲けてもらっているのだから。結局有効に使えなかったということになる。

やっぱり今言ったようなことで、引っ張らせてもらわなければいけませんよ。71年間生きておりますので。それと、政治の世界で言うと34歳の時からやっていますので、37年間ですか、それだけの責任を持って言っている。

とにかく、教員の中からふつふつと、例えば、子どもさんが一人でも亡くなればね、どうしたらええですかと、なんで出てこないのかしらと思います。解決策はそう簡単には、簡単に済むようなものじゃありません。そんなことはわかります。トヨタで言ったら、当時は石油がなくなるって言われていたんだけど、どうやったらいいですかと考えると、ハイブリッドなどが出てくる。まあ、そういうことを感じない。民間の企業では考えられない。民間の企業なら倒産します、ただ、倒産しないもんで、名古屋市役所は。

だいたい基金だけで4,000億くらいあるでしょ、全部入れると。公債償還基金が2,000億、その他全部トータルだけれども、全部ひもがそれぞれついているように見えるけど、役所が貯金しているのは意味がないですよ、これ。貯金しているのだったら銀行をやったらどうだ。そのかわり、これも一瞬でつぶれますけど。

具体的に言うと、とりあえずスクールカウンセラー150人と同じ数くらいの針路の人材。学校に入って、常勤で。すぐに常勤にはならないですけど、非常勤でやってもらわないといけないけど、1年くらい、トレーニングしないといけないので。合わせて300人くらいになる。高原子ども応援室首席指導主事に言わせると、アメリカではキャリアの方も、スクールカウンセラーの方も同じだと言っていた。

まあそういうことで、子どもさんの人生と、おっかさんの苦しみを全力を挙げて支える。ないしは、アメリカのスクールカウンセラーに言わせると、不自由な方への応援もあるけど、やっぱりスプートニク・ショックで、スプートニクがソ連に負けてしまったというアメリカのショックがね、これではいけないと。とにかく子どもの中から優秀な者を発見しなくてはいけないというその危機感がものすごい強かったと、スクールカウンセラーが発達してきたということには。

そういう面も入れて、日本のフロントランナーをやっていくのがいいのではないですか。

もう一つだけ最後に言うと、千葉県の小学生が、親の虐待で亡くなったと報道があった。あの時にやっぱり不登校になってるんだね。向こうの幹部にどうなつとるのと聞いてみた。不登校になっているし、スクールカウンセラーってどうなつとるのと聞いたら、いや、非常勤もおりませんと。名古屋だって、常勤カウンセラーを苦勞しながらやっているがね。育てながらと言ったら、そういうことになると、お金がないですからと言うわけ。金がないんだったら、自分の給料減らしてやったらどうだねと言ってやった。嘘だろう、本当に金がないなら公務員の給料が高いってありえませんよ。企業に金がないと、まず経営陣が給料を減らしますから、必ず。

日本は、この財政危機というのが、圧倒的に日本の国を悪くしている。ということで、ちゃんとチャレンジを。マスコミもすぐあおるでしょ。財政危機でやりかけるでしょ。全部でないがNHKも福祉関係はいいかと思うけども、財政関係は間違ってますよ。

私ばかりしゃべっていてもしょうがないけど、なかなかこういうチャンスがないので今、ハローワークに全国へ呼びかけましようと言っている。申し込み資格の一つ目は、キャリアコンサルタントの資格を有するもの。二つ目は、資格はないがそれと同等だと自分で自信のあるもの。で、一度説明会をやましよう、採用の前に。名古屋と東京でやましよう、今自分で段取りしています。

ということで、サンキュー フォー リスニング。

(事務局)

市長ありがとうございます。それでは、既に本題の方にも入っておりますけど、これより議事進行につきましては市長の方へお願いしたいと存じます。

(河村市長)

ナゴヤ・スクール・イノベーションの説明をどうぞ。

(事務局)

では、事務局の方より資料のご説明をさせていただきたいと存じます。

資料でございますけれども、教育委員会の考える「誰一人取り残すことのない個別最適化された学びを実現させる公教育のチャレンジ ナゴヤスクールイノベーション」について、ご説明させていただきます。

初めに、個別最適化された学びを提供する授業改善の推進です。おおきく3つの柱で事業を推進してまいりたいと考えております。

1つ目は、「民間の力を活用した学校における実践研究について」であります。今年度は、矢田小学校をモデル実践校といたしまして、プロジェクト型学習やタブレット端末を活用した授業改善に取り組んだところであります。来年度につきましても、引き続き全市的な拡大に向けて、矢田小学校での実践を継続しますとともに、新たに、その右に掲げております、学校からの授業改善に関するニーズと民間企業・教育関係機関の力のマッチングをプロポーザルにより具現化するマッチングプロジェクトに取り組むたいと考えております。

2つ目は、選抜した教員における実践研究でございます。一人ひとりの子どもを大切にするエデュケーションの具現化を図るため、選抜した教員による授業改善を実践するとともに、国内外における先進校の視察研究に引き続き取り組みたいと考えてございます。

3点目でございます。全ての教職員を対象とした意識改革を推進するための取り組みでございます。学習会を開催するとともに、インクルーシブ教育、ICTの活用等に係る研修の充実を図りたいと考えています。

次に、新時代の学びを支える環境整備についてでございます。個別最適化された学びの実現に向け、ICT環境の整備に努めてまいりたいという風にと考えております。

最後に、保護者や市民の理解促進を図るための広報・啓発であります。個別最適化された学びや、学校改革の必要性について広く市民に発信してまいりたいと考えております。

簡単ではございますが、以上で、説明を終わります。

(河村市長)

はい、ありがとうございます。

まあ、こういうことでございますけど、これにさらに、キャリアという表現はあまり使わない方がいい、どうしても就労支援という感じになっちゃう。もうちょっと、パーソナル サービスといったか、パーソナルやヒューマンサービス。前提としてやらなければいけないのは、教育委員会はやれないと言っているけど、子ども応援委員会の人たち、スクールカウンセラーを教育委員会の中にちゃんと位置付けないといけない。校長と教頭と教員ばかり。儒教ではないんだから、そういう人ばかり並んではいけないよと。まず位置付けなくてはならない。そこはロサンゼルスはどうなってるのかというと、ウェルフェアは福祉にとられるけど、アンド ヒューマンサービス。日本から行った教育委員会が訳してきたら福祉と訳す。これは厚労省がそうしたからそうなったのだが、ヒューマンサービスは違うんだと高原さんは言っていたけど、ほんとにいわゆるヒューマンサービス。人間全般の、どうやって生きていくかと言っていました。

これはその、第一の作業は、来年度位置付けてもらわないといけない。それか、儒教によって名古屋の教育は行くと反対に宣言するか。朱子学を学ぶと。学校の教員はすべからず論語を暗記せよ。そんなのそう書けばいいですよ、そんなことできるわけがない、今頃。という話になりますので、そこと今の、職業の方につないでいかないと。なぜかというと、相談だけでは、やっぱり絶望があるんですよ。相談しないよりは、相談はした方がいいですよ、専門家によって。臨床心理士さんの力も借りて。かと言って、この子は、どうやって社会の中であと何十年生きていけるかな、というような点について、やっぱり希望が見えるようなことをやらないと、人間はやっぱり絶望しちゃうので。というのが今のところ思っていること。そこに手を差し伸べようかと。

ここにも書いてあるが、やっぱり先生が変わらないといけない。私たちも変わら

ないといけない。儒教から変わらなければいけない、教師が。子どもたちはお客さんと言いますよね。カスタマー。今、日本はそういう感覚じゃないですか。これは、校長会の（前）会長に会いに行ったとき、全部やるのは無理ですわ、と言っていた。正直に言ってくれた。ようやく分かってきましたけど。そういうことです。

分業という言葉もちょっと感じ悪い。分業というとやらないようになる。社会の先生、英語の先生でも、やっぱり子どもの人生を応援してやらなければいけないけども、主体的な、持つところはシェアしていかないといけないという感覚。だから、今の一万人の教員の中から、私はこっちに変わりたい。数学と社会の授業は飽きたと、そういう人が出てこないかと。

（西淵茂男委員）

出てきましたよ。

（河村市長）

一人いただろう、名市大で。一人いましたよ、教員だけども、こちらの方、カウンセラーやりたいって。広い意味でのカウンセラー。

（河村市長）

それでは、小栗委員の方からお願いします。

（小栗成男委員）

本年もよろしくお願いします。

いろいろと多岐にわたる市長の話がありましたので、その話と自分の経験値で話をさせていただきたい。だいたい3分ぐらいずつですね。

まず、市長にお礼を申し上げなくてははいけないのは、ICTの予算、大変取っていただいてありがとうございます。

（河村市長）

まだ少ない。一人一台早くやらないといけないけど、中身がついてこないといけないので、教員の中からもっとふつふつと、勉強会の一つでもできたら、と言いたい。教員の中で。

（小栗委員）

この前、工藤先生の麴町中学校でいろいろ話を聞いてきたり、それから渋谷区の教育委員会。既にタブレットを導入していて、非常にいいなと思ったのは、先ほど儒教の話を僕も市長と同感するところはあるのですけれど、アメリカにいましたのでね。まあ日本のいいところでもあるし、変えていかなければいけないところ。

で、そのICTを使っていった先進的なところで印象的だったのは、自分の考えや意見が伝え易くなった、というようなことが、1回目より小学生が11%、中学生が13%アップしたという。何が言いたいかというと、裏返していくと今の教育

って、自分の考えや意見を伝えないというものだったということだと思う。それを機械によって言葉ではなくて、伝え易くなった。これは非常にICTの効果があるので、期待できるなど。

それからICTを使うことによって、他人と比較する。他人と比較して、同じところ、違うところが分かるようになったと。これも小学生でいくと8%、中学生でいくと10%くらい、一回目二回目でいくと上がっている。まあ、こういったところも期待できるのではないかと。

一方で、先生の業務が減りますか、働き方改革の点。そうすると正直言ってあまり減っていない。それから、学力が上がりましたかという点でいくとそれを導入したからといって、決して上がってきたというわけではないというような意見もありました。

まあそういったことも、ICTの先取りをしながら話をして、ここからは私の意見なんですけど、市長がおっしゃるように、教員の考え方とかを変えていかなければいけないのは当然なんですけど、例えば矢田小学校でやっていることを区です、学区の問題とかエリア問題はあると思うんですけど、例えば、瑞穂区とか昭和区とか港区でもいいんですけど、区ごとに特化して、そこだけ新しいことをやるっていうのは無理なのか。

(河村市長)

一校じゃなくて。それは重要だね。

(小栗委員)

一校ではなく、区でやってみる。そうすると、そこで自由にできるように。私から市長に提案させていただいたように、キャリアの話をするときでも、結局日本人がやっているのと、日本人の価値観で全部押し付けてしまう。なので外国人の先生を入れてほしいとお願いをさせていただいたと思うんですけど。そういったことも、市長の思いと、また私も海外経験していて、日本の課題、いいところも悪いところもあるので、そこからはじめて、例えばそれを1区からスタートして、3区に広めるとか、そういうようなことをやって、特区地区みたいなものを作っていくと、逆にこう、もっとスピード感を上げてやっていけるのではないかなど。

(河村市長)

小中高一貫とかもチャレンジできるわけ。

(小栗委員)

そうなると思います。

(河村市長)

プロジェクトラーニングする場合は、やっぱりプロジェクトで進んでいくので、学年ごとに、歳ごとに形式的に切ってしまうのは、いいことないと言われています

ね。そうすると、区でやると名古屋の場合は、高校を持っているので、思い切って小中高一貫にした方が相当できる。まあそういうことをやれる区があるなら、いっぺんやってみるか。

(小栗委員)

一度チャレンジしてもいいのではないかと。

(河村市長)

名市大は大学までやってくれと。

(小栗委員)

そうすると結局市長がおっしゃったように、職業のことと、もう一つ申し上げたいのは、学力の偏差値みたいなものがあって、親御さんが気にしているのは、どこの大学に入りたいとか、そうってくる。そうすると、これも難しいところなんです。ある程度大学にこだわらない人たち、偏差値にこだわらない人たち、そういった人たちというのは、ちょっと細かくなりますが、我々小学生中学生っていうのは受ける授業の量が多すぎると思うんです。多すぎて、それを選択できるようにしていく。学生が、もうこの授業は要らないとか。もう既に、東京ではその授業受けなくていい、みたいなのところもある。選択制にさせる。そこで、市長のおっしゃっていたようにキャリアの人たちが、その時間を使って、将来自分のなりたいものになるためにという時間にそこを使っていけるように。それが例えば区別とか、学校別とかでやり始めていくと、何か可能性が出てくるんじゃないかなと。

で、学力的にどこの大学でもいい、自分は偏差値とか気にしない、という人は、すでに職業を目指しているんで、その人たち一人ひとりに明るい未来を、この(キャリア・パスの資料の)15でもいいですし10でもいいですので、分けてあげる。逆にやっぱり市民の力、我々民間の力も入っていただいて、アドバイスしていくというようなこともやってもおもしろいかな、と思いました。

(河村市長)

内申点とか、アメリカも推薦状はあるみたいけども、今の内申点は廃止しないといけないのでないか。先生も困っているんじゃないの、点数で差がつかないから、態度でつけるしかない。内申美人っていう言葉があるらしい。内申点でいい点とるために、教員の前ではすべからく美しくなる。

はい、それでは次は、船津さんから。

(船津静代委員)

はい。本年もよろしく申し上げます。

何が言いたいかというと、最終的には、ナゴヤ子ども応援大綱、先般ですね、変えていただきまして。『大きくなったら何になるの?』と一緒に考えて将来の針路を応援します」と変えていただいて、ありがとうございます。そして、常勤のスク

ールカウンセラーの配置については本当にありがたいと思っています。私の周りにスクールカウンセラーをやっていますという臨床心理士もたくさんいるのですが、常勤になることで、名古屋市の考え方に共感できると。学校の中に入って、自分たちが子どもたちを支えるんだと。子どものことを中心にして考えられるという発言がすごく増えていまして。常勤化ってすごく大事だったなと感じています。

そういう点でいきますと、先ほどキャリアナビゲーターの話がありましたけれども、子どもが居場所として、安心できる場所がないと、将来のことも考えられないなと思っていて、将来のことを考えて希望があるから、そこに夢を抱いて前に進めるってということもありますけど、そのベースには安心する必要があるので、スクールカウンセラーがいるってことは必要だと思います。

そういう点で言うと、図書室の司書ももっと増やしていただけると。「日本一子どもを応援するマチ ナゴヤ」、にしては、図書室の司書の数は断然足りないかなと思っていて、東白壁小学校で図書室を見学にいったら、司書の方がすごく頑張られているのを拝見したのですけれど。そこは、子どもたちが本当に楽しく図書室に来ていて、まあちょっと授業を抜けてくる子もいれば、そこで、先生といろんなことをやって、居場所がすごく明るくて、図書室の雰囲気がとても新鮮だったんですよね。本だけが置いてあるわけじゃなくて。子どもたちが自分たちで選書するってこともできてますし。子どもたちが読みたいものが入ってくるっていう点でいうと、子どもたちの量的な成長支援ができていって思ってたんですよ。図書室も一つ大事だになって思います。

もう一つはキャリアナビゲーター。はじめは私、キャリアコンサルタントは小学校に行っても何にもできないと思いますと言っていましたけど、入れていただいて、この間、矢田小学校のPBLの授業とキャリアナビゲーターの方にお会いしました。お昼をみんなと一緒に食べたりとか、そこには、ここまで細かくないですけど、今世の中でどんな仕事があるのか、キャリアナビゲーターの方がいろいろ工夫されて、子どもたちが面白く社会のことを考えられるように、工夫されていました。その部屋がすごくいいなと思いましたので、これも一つの居場所になると思うんですよ。

こういう場所がたくさんできることが、さっき市長のおっしゃっていた非常勤ということでも、スクールカウンセラーも非常勤からはじまってここまで来ていますので、非常勤なら非常勤で、それがその先、常勤化するっていうイメージがスクールカウンセラーで一つモデルであるので。実は、私たちキャリアコンサルタントも日本の大学だと臨床心理士の学生相談をモデルにここまで常勤化されている。だからスクールカウンセラーが先に進んでいるってことは、キャリアナビゲーターもうまくいくっていう自信というか、私はうまくいくんだろうなと思っています。

(河村市長)

学校側がちゃんと受け入れたら、うまいこといく。

(船津委員)

そうなんです。矢田小学校のキャリアナビゲーターも、校長先生が中心となって、キャリアナビゲーターの方とも垣根が全然ない。東白壁小学校も、司書の方と先生の垣根が全然ないところが本当にうまくいっているところだと思うので。

(河村市長)

垣根はないけど給料が全然違うだろう。こういうことでいいのかと。

(船津委員)

そこは何とかして・・・。

気持ちだけでは生活できないところもありますので。

それで、矢田小学校のPBL、先ほどの小栗さんの話にもありましたけど、タブレット使っている中で、子どもたちの発話がすごくて。先生にその場ですぐお願い事をするとか。多分この子は、ノートを見るとすごく字が汚いんだろうけど、タブレットをすごく上手に操っていると、子どもが生きる場面がたくさんあるかなと思うし、校長先生がおっしゃっていたのは、タブレットを導入したことで、採点だったりとか、教員が持ち帰ってまで仕事していたことが減ってきて、本来の指導に時間がさけるというお話をされていたのが、それが本来の目的じゃないかなという風に。子どもたちの進捗状況が、その場その場でリアルに分かるので、個別最適化という点では、使えますという風に思いました。

最後に一つお願いが、ありまして。さっき、キャリアっていう言葉が、ちょっと違うっていう話、あったじゃないですか。で、急に変わるの難しいと思うのですよ。で、前に「ライフ(人生)」をつけるだけで大分違うと思うのです。「ライフキャリア」。もしも、それいいなと思っていただけたら、ナゴヤ子ども応援大綱の中の、「なごや版キャリア支援」とか、「キャリアについて考える」、を、「ライフキャリアについて考える」、に一回変えていただいたところから、次の事柄に変えていただけるといいかなと思ったので、キャリアナビゲーターも、ライフキャリアナビゲーターとかになると、「ライフ」が入って、そうするとスクールカウンセラーとのやり取りもうまくいって、いいと思いました。以上です。

(河村市長)

常勤化してきた以上は、そのかわり、ちゃんと責任を持ってもらおうと思っている。ちゃんと位置付けを。当局どうなっているのか。

(教育委員会事務局職員)

考えています。

(河村市長)

考えていると言って、100年かからないか。位置付けをして、責任を持ってもらわないと。

(船津委員)

スクールカウンセラーは資質も大事なので、そうですね。

(河村市長)

よく言っているけれども、ロサンゼルスではなんか事故なんかがあると、記者会見をカウンセラーがやっておる。教員はやらない。記者会見は私たちがやるんですよ、と女の人が出ていた。そこまで持っていかなければならない。明日からすぐやれと言わないが、トレーニングがいるので。少なくともルールというか、目指すところはしっかり位置付けないといけないと思う。

図書室はいいね。

また名前については、ライフキャリアかヒューマンサービスか、一度ちょっと考えなくては、考えましょう。

(船津委員)

そうですね。

(河村市長)

では、小嶋委員。

(小嶋雅代委員)

はい、教育委員を拝命しまして3年が終わり、いろいろ勉強させていただいてしみじみ思うことは、この3年の間でも教育をめぐる環境は変わってきていて、河村市長が前々からおっしゃっていたことに、いよいよ時代がついてきた感があるなあという風に思います。

市長は先ほどから、教員の中から「ふつふつとでてこないといけない。」とおっしゃいますが、私は、教員の中からふつふつと湧き上がっているものがあると感じます。その、ふつふつと湧き上がっている教員のやる気を引き出すような、教育委員会でなければいけないと思っていますし、そのために、各教育委員会の幹部のみなさんはいろいろ考えていらっしゃると思いますので、それを教育委員としては応援していきたいと思っています。

私、本日はICT環境の整備について市長さんをお願いしなくてはと思っていたのですが、これまでの市長さんのお話で、既にその重要性は十分認識してくださっていると感じました。ICT環境については、単にタブレット・パソコンを使いこなせるというだけではなく、学校環境そのものから見直す必要があります。ICT環境の整備というのは働き方改革の点からも必要不可欠なものであって、今このタイミングで大きく変える必要があるべきだと思います。

市長さんをご承知とは思いますが、昨年3月時点で、名古屋市の学習用コンピューター整備状況は、政令市20市中18位、一番が大好きな市長さんなのに、ワースト3位。普通教室の大型プロジェクターについても、名古屋市は、その設置率は政令市中17位。これはもう、大きくこの機会に改善していただきたいと思いま

す。

本日、市長さんはこの点については十分ご理解くださっていることがご発言からも伝わってきたのですが、機械を買うだけでいいのではなくて、ICT環境の管理と維持には、大変な人の手間がかかります。なので、思い切って人員を配置する予算をつけることも考えていただきますよう、よろしくお願ひします。本日、「あるだけではなくて、どう使いこなすかということまで考えることが必要だ。」と、市長さんもお発言しておられましたが、私も深く共感いたします。せつかくのこの機会を活かして、名古屋の子どもたちが、ICTを使いこなして世界に羽ばたけるような方向を今、作らなくてははいけないと思ひます。

あと一つですが、お願ひしたいのが、船津委員がおっしゃった図書館司書についてです。市長さんとお話するたび、市長さんはをたくさん読んでいらっしゃるんだなあということを感じてきましたが、やはりこの本という物から学ぶということは、今のこのICTの世の中でも、不可欠だと思ひます。本になじむ、ということは、本当に小さいころからの環境というのが、市長さんもそうだったと思ひますが、大事だと思ひます。小学校の図書館というのは、本になじむための大きなゲートであるっていう風を感じています。その図書館を充実させるというのは、今、名古屋市の中でとても大切だと思ひます。

東白壁小学校を視察して、しみじみ思ったのですが、「子どもたちには家庭外の居場所が必要だ。」と常々市長さんおっしゃっていたと思ひますが、学校の中で、教室の他に保健室、そして図書館というのはとても大事な場なんですよね。図書館が、誰もいないところではなくて、迎えてくれる図書館の司書さんがいる、声をかけてくれる、こんな本読んだらいいんだよ、とサジェスチョンしてくれる場ということで、東白壁小学校では低学年の子たちが、みんな自分の好きな本を楽しそうに選んでいました。あの環境をすべての名古屋市の小学生の子たちに与えてあげたいのです。

是非とも、図書館司書を全小学校に配置して、子ども応援委員会の中に入れていくような位置付けを考えてみてはいかががでしょうか。図書館司書さんは、教員と応援委員会をつなぐ役割も担えると思ひるので、これはぜひ進めていただきたいと思ひます。

(河村市長)

ふつふつと実は湧いているというのは地上から見えないといけない。地下にふつふつとあります、と。地熱みたいなマグマみたいなものも物理学的に言えばある。地上から見て、教員がどっかで勉強会ははじめましたとか、私のところに文句言ってくるくらい、そういう風になってくれば、それが「ふつふつと湧いてくる」ということ。

(小嶋委員)

地下よりは上の方に、ありますので。もう、すぐそこまで来ていますので、市長、楽しみになさってください。

(河村市長)

ここでワーワー言っているより、一万人いるのだから、言ってきてくれないといけない。

(小嶋委員)

その中からやはり、いろいろな役割で活躍してくれる教員が出て下さるとよいですね。

(河村市長)

図書館の司書もそうだが、人の予算もそう。夏に一応何人と決めたが、あれは仮置きということになっている。他の局に聞いたら、予算付けてもらっても人が増えないからやらせないのだとある局長がいていたけど、そういうことではないです。必要なことは言ってきてちょうだい。7兆1000億ですから、貿易黒字。第二位は横浜の3兆ですから、ものすごいよこれ。他の都市が聞いたらびっくりしますよ。

(小嶋委員)

是非、子どもの教育への投資をお願いいたします。

(河村市長)

そちらの方へは、ためらいなく使わないといけない、司書も確かにそう。どういう風にやっていくか。だいたい採用すると永年雇用ですとやるわけか、司書ってというのは。司書は教員とは違うのか、司書職は別にあるの。

(西淵委員)

教員とは違う。司書教諭っていうのもある。それは教諭。司書はまた別で司書。

(河村市長)

タブレットになってきたで、司書が能力があるかどうか、ものすごい違うでしょ、そうなるよ。

(小嶋委員)

司書さんはたいてい、ICT機器を使えると思います。タブレット、パソコンの使用について、子どもたちが困ったことがあれば、図書館でも相談に乗ることができるのでは。図書館は、大学では情報センターになっており、学校でもそういう位置づけでも人を配置できるのではないのでしょうか。

(河村市長)

こういう人を入れるだけではいけないので、高度利用化というのか。高度活用化

みたいな。提案してもらおうとやりやすい。

(小嶋委員)

図書室は、小学校ではとても大きな可能性があります。すべての小学校に図書室があります。名古屋市の図書館と連動した本の貸し借りであったり。いろいろな可能性があると思います。市長は国会図書館を大変活用されていたと伺っており、図書館の有用性はよくご理解いただけるのではないのでしょうか。

(河村市長)

図書室とか、行った記憶がないなあ。子どものころ、怪盗ルパンとか、読んだ記憶はある。

はい、それでは西淵委員から。

(西淵委員)

市長とお話する機会が少なくて、言いたいことはたくさんあったのですが、子ども応援委員会、スクールカウンセラーの常勤化をしていただいて、市長の卓越した見識だとも思います。

学会を立ちあげました。東京学芸大学と、北海道教育大学と、大阪教育大学と、愛知教育大学が中心となって。「応援」でないんですけど、日本教育支援協働学会。まあ、市長は対立だと言ってましたけど、協働ということで。今年が2回目なのですが、教員の権威性と、それから協働を阻むものの研究だとか、多職種のあり方について、研究する学会をつくりまして、今度2月29日に愛教大で行いますので、名古屋市教育委員会から子ども応援委員会の水谷室長もシンポジストとして出る。名古屋市のスクールカウンセラーの常勤化について、他都市も学びたいということがあるものですから、そういう点について室長に話してもらおう。はじめは高原さんにと考えたのですが、スクールカウンセラーと被るものですから室長さんに出していただいて話をしてもらおう。基調講演は山野さん。

(河村市長)

SSW（スクールソーシャルワーカー）の。

(西淵委員)

山野さんに講演していただいて、そのあとシンポジウムをする。やっぱり、いろんな職種が学校の中に入ってくるときに、どういう役割で、どういう風にお互いに、分業ではないが協働的にやっていくか、中身がうまく機能していかないと、やっぱり入れただけではだめ。そこのところを十分こなしていきたいなというものです。ぜひ、市長さんも、時間があつたら見に来ていただけるといいかなと思います。

それから、ハローワークの話がでましたけれども、秋田県の大館市だっただけとお思います。「子どもハローワーク」という取り組みを、教育委員会全体がやっている。

ハローワークに企業が逆に子どものボランティアを募集する。こんなことやってほしいという求人カードを、教育委員会が掲示すると、子どもたちがそれに応募してくる。それで、いろんな仕事体験をしてくる。

これもまた、経済同友会さんでお話ししてこようと思っと思っています。経済界とのつながりを持って、子どもたちにキャリアを考えさせていく取り組みが必要かと思っています

それから、子どもたちが希望を持つことがすごく大事だという風に思いまして、希望をもっていかなければいけないのですが、そのためには相談とか、希望を持てるような話し合いを、授業が終わった後にやる時間がないといけないと思う。今だと、なかなかないものですから、画期的なのは子どもの未来応援講師。勉強もやって、その子の状態が分かってその授業の後に、あなたはどういうことに向いているかといった相談に乗り、それをキャリアにつなげていくといった方法、これもなかなか、すごくいい取り組みだと思うものですから、もう少したくさん、今だと85校くらいなものですから。

もう一つは、授業後となると部活動。部活動の完全民営化、完全民営化は恐らく日本初だと思います。これをやることによりまして、私も教員をやっていたけど、教員も、授業をやっている間はなんにもできないものですから、授業終わった後に教材を研究して、勉強して面白い授業を次の日にやるっていう風にしていかないと、子どもたちも勉強についていけないということになって、授業がいやになって、学校へ来ないという、そういう悪循環になっていくものですから。そこで十分研究する時間とかとれるものですから、そうすると相談に乗る時間もとれる。この部活動の完全民営化は、非常に大きい施策だな、と思っています。ぜひお願いしたいなあと思っっているところです。

お願いばかりですけど、また、ゆっくり話せる時間があるとありがたいなと思っています。

(河村市長)

学会で勉強会を始めていただいて、ありがたい。政令市長会で何回言ったか、4回か5回言った。常勤のスクールカウンセラーが不可欠だと、子どもさんのいろんな苦しみに対応していく、いっぺん見に来てちょうよと。でも見に来たところはこの間までゼロ。政令市20市ありますから。この前仙台市がきた。大阪市は名古屋城の関係があるので来た。みんなこんなことまでできない。政令市が集まっても、ほとんど、いじめの話ばかり出ますけど、表へは。それについてどう対応していくかについて、他のところがやっているいいところを見に行くぐらいのこともやらないのですよ。

ただ一回あったのは、神戸市の今の市長の久元さん。河村さん、あれ、常勤のスクールカウンセラーってどういうこと？それぐらいのものです。静岡県知事が来た時に、記者会見やらなくていいのかということやらない、教育委員会にちょっと話をするとみんなつぶれると。教師支配なもので。それに対抗するだけのもの、アメリカを見てこればいい。僕だってロサンゼルスに行って、これえらいことになった

なあと、感じたんだ、常勤でやらないといけないと。

(小嶋委員)

調布のアメリカンスクールでスクールカウンセラーのことをお話しして、市長の言っていたこと、よくわかりました。校長先生のパートナーとして、学校にいる感じ。

(河村市長)

ハローワークと、包括的な部活動の完全民営化。打ち出しの言葉がいると思う。はじめに廃止だっていうので、逆のハレーションが起こってしまった。民営化だよ、と言って、この予算付けるときには、ちょっと新聞などの書きぶりがいいように。完全民営化でもいいけど。

ということで、教育長が何にも言わないでは、言いたそうな顔をしている。

(鈴木誠二教育長)

言いたいこといっぱいありますけども時間がなくなってしまったので。4月から教育長をやらせていただいて、学校教育だけで18万人の子どもを預かっている。一人っ子が多いものですから、親御さん入れると54万人、おじいちゃんおばあちゃん入れると、名古屋の人口の半分と向き合っていると思っています。今日、鎌田委員には残念ながらお越し頂けませんでしたけど、今聞かれた通り、ふつふつといろんな意見が、教育委員会は毎月2回集まっていますけど、本当に、時間が毎回足らなくなるような議論をしております、頼もしいメンバーだと思っています。後ろにいる専門家集団も頼もしい仲間だと思ってやらせていただいています。

人口の半分以上を相手にしている、ということから言うと、昨年度の予算が約1,700億くらい、もうちょっといただいてもいいかなと思っていますので、さまざまお願いをさせていただいて、1円も削らずに対応していただきたいと思っています。

今日は一つ、あまり表立っての議論になっていない、特別支援教育です。とりわけ高等特別支援学校についてです。特別支援学校のニーズは非常に高まっています。小中学校の特別支援学級に在席する子どもの数は、平成23年度に比べまして、1.42倍に膨れ上がっている状況です。小中学校でその数が増えていますし、昔と違って、特別支援学級に、むしろ望んで入ってくる子も増えてますので、今後も特別支援学級、特別支援学校に入りたい子どもが増えていくだろうと思っています。

高等特別支援学校については、社会へ出る、最後の学校という部分もあります。守山養護学校に作られた産業科、市長も見られたと思いますが、将来の就労に向けて、子どもたちが本当に一生懸命学んでいる姿を拝見しています。それで、普通科の特別支援学校の高等部の生徒に比べると、就労率も高く、産業科の卒業生は約半分、50%が正社員として就労しています。その定着率も高く、普通科の卒業生は就職した後、離職率が、10人に1人くらいは何年かでやめてしまうが、産業科の

生徒は2%くらいの離職率ということで、ほとんどの子が職業人として定着しているということでございます。

この枠を増やす必要があります。特別支援学級の数も、今年度ベースでも、全市で28教室足りません。これ放っておくと数年後に50教室足りないということになりまして、以前からお話ししている、若宮商業高校の敷地内に、併設の形で、高等特別支援学校を作りたいと、財政局と相談させていただいております。

1,700億の予算規模からすれば、あとわずかだと思っておりますので、この実現に向け、市長からもご支援をいただければと思っています。

(河村市長)

プロのキャリア支援を増やす、そちらの方が前提にならないといけない。工夫してやることは一定の場合には必要になる。やっぱりインクルージョンの原国だから、アメリカは。

(鈴木教育長)

理想のインクルーシブ教育からすると、こういう子たちを特別支援教育として取り出すことは、どうかと思います。すべての学校が、そういう子も一緒に受けられるというのが理想だと思いますけど、現状では残念ながら、すべての学校で支えるにはいろんな施設とか、人というのもありますので、今のところ、あと10年20年は仕方がないのかなと私も思っています。矛盾をはらみながらですけど、この子たちの支援は是非していかなくてはいけないと思っています。

(河村市長)

受け皿の方もね、この間、中法人会がいっぺんやってくれたように。国税庁は、健全な納税者を育てるということで大賛成だと言っていますので。法人会が全国的に見ると一番大きな組織なので、中法人会の中で、皆さん受け入れていこうと。

(鈴木教育長)

障害者雇用促進法で、法定雇用率が変わったのは大きいと思う。やっぱりそういう方を求めている企業も多いと思う。

(河村市長)

受け入れていこうというか、一緒に働いていくんだ、社会で。そういう風土を名古屋からでも作っていかないといけない。でかいテーマになるんだよ、本当に。社会変革ですわ。

まあとりあえず、そういうことですわ。じゃあ、またいろんな機会をとらえて。

(12時12分終了)